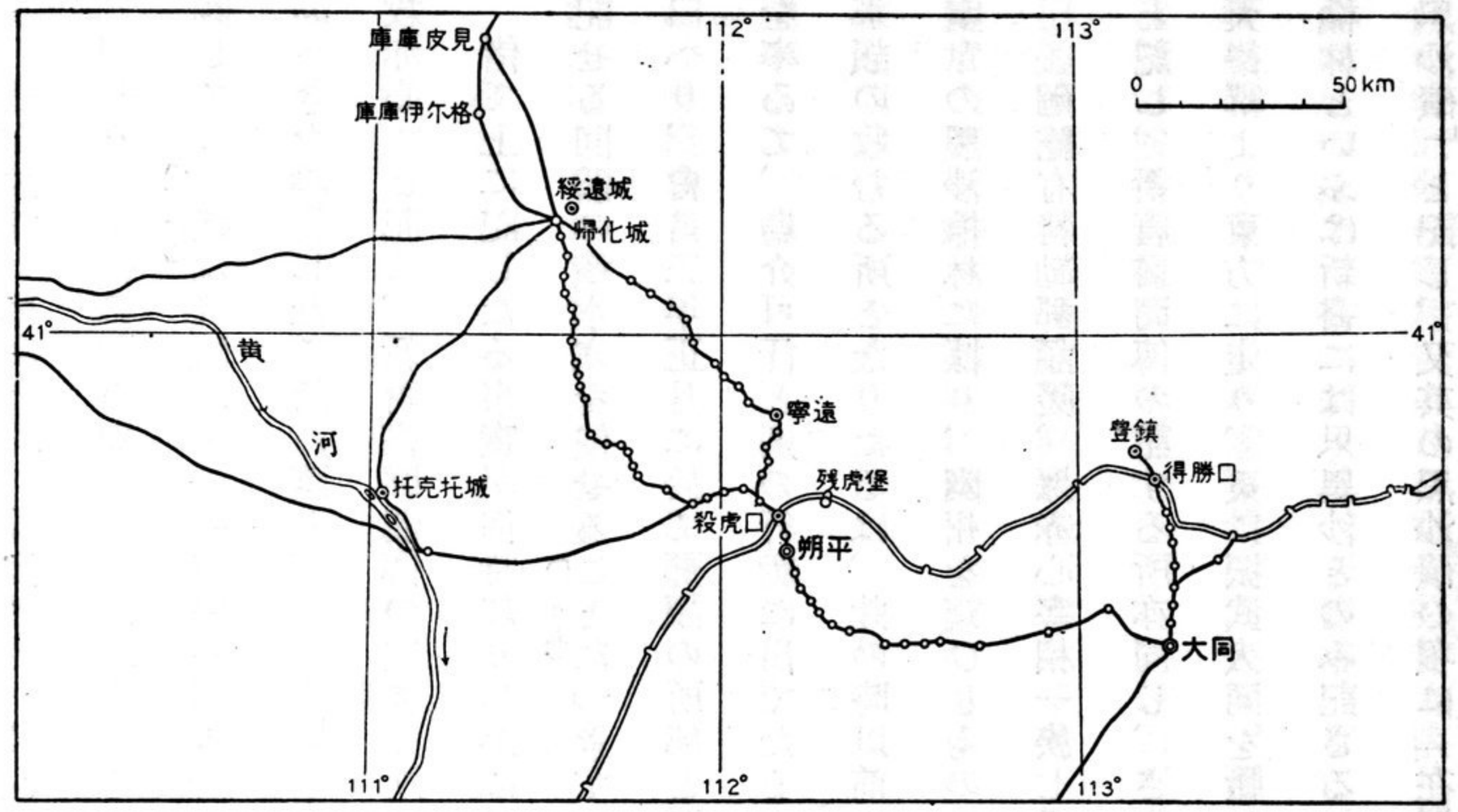

るより、黑沙楡林と稱せられたるに外ならざる可ければ、大概今の歸化城の北方七十里許の地と見るべく、Hirth〔一九八〕氏が唐書突厥傳に見ゆる黑沙磧に就きて、Elias 氏の旅行記を引き、陰山の北側の傾斜面に擴がれる此の沙磧は、漢人の沙漠の方面に設けたる最終の部落なる Ku-ku Illikung（實は Kuku Irghe なり）地方より初まれるものなるべしと見たるは正鵠を得たるものなるべく、參謀本部の編纂に係る東亞輿地圖には、別圖の如く之を庫庫伊爾格と記し、カーヴィメーターにて測るに歸化城との距離邦里八里弱の所に在り、卽ち振武軍の北七十里と曰ふ黑沙磧の位置が、此の地の附近より起れるものと見るは誤らざる觀察と認むるを得べし。突厥滅亡の後、室韋の一部が此の地方を占めたりしことは疑ふ可らざる事實にして、德宗の時、咸安公主の降嫁に當り、回鶻の公主將軍等が、聘を齎して公主を迎へんとせし時、唐書回鶻傳に「至振武、爲室韋所鈔、戰死」と記せるが如きは、其の一證なり、那頡啜が何時幽州〔一九九〕を侵さんとして、張忠武の弟、仲至の爲に大敗を蒙るに至りしかは明かならず、通鑑は之を以て漫然會昌二年五月の條に繫けたれ共、註記には「諸書皆不言仲武破那頡啜月日、故附于